



Title	中国におけるCEFRに関する文献から見た研究動向
Author(s)	李, 偉
Citation	外国語教育のフロンティア. 2020, 3, p. 95-109
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/75625
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

中国におけるCEFRに関する文献から見た研究動向

Research Trend on the CEFR in China Based on the Analysis of Related Literature

李 偉

要約

本調査報告は、中国学術情報データベースで検索できる論文を対象に、中国におけるCEFRに関する論議について、過去から現在にかけてどのような人々が何についてどのような指摘をしてきたのかを整理し、検討を行うものである。

(1) 中国におけるCEFR関係の論議は2011年から活発し、(2) 執筆者は上海や北京、広東、沿岸諸都市、直轄市の大学に所属する教師が半数以上を占め、(3) 研究対象は高等教育段階が全体の7割強を占めること (4) 「学習者」「言語能力」「言語能力基準」「ヨーロッパ共通参照枠」「言語指導」「漢語指導」「漢語水平試験」は一貫して研究者の関心を集めていること、(5) 英語教育と国際中国語教育関係の論議が9割近くを占めること、(6) 中国英語学習者能力尺度の開発とその検証、外国語教育現場でのCEFR理念の活用、いろいろな試験とCEFRとの比較などに関する指摘がなされたこと、の6点が明らかになった。

従来の研究で明らかにされていなかった問題点は以下の5点にまとめられる。

(1) 研究対象となる学習段階には著しい偏りが見受けられる。中学段階、小学段階、学前段階の研究が期待されている。すべてのレベルの学習者の能力尺度の構築研究を進めるための支えにもなると考えている。

(2) CEFRを中国の文脈で応用する際に、学術効果と中国大学の実情の間バランスをとりながら国家レベルの課程標準・指導要領・言語政策の制定が行われているが、CEFRが中国化していくプロセスはから受けている影響が大きい。

(3) 研究手法に関して、もっと広い範囲での質的な研究手法の活用が課題の一つであるといえよう。質的研究の方法を選択した研究は少しずつ増えていく傾向にあるが、課程標準策定に関わっている専門家へのインタビュー、特定分野の権威学者へのインタビューが比較的多く見受けられるが、現場の教師へのインタビューについて管見の限り見受けられなかった。

(4) 教員養成、教師関係の研究は3本しか見受けられなかった。CEFRをどの程度現場に応用できるのか現場の教員に頼るところが大きいと考えられるので、CEFR関係の教師研究を進める余地がまだ十分にあると考えている。

(5) 特殊教育、他の言語教育に関する論述が十分とは言えない。CEFRはいろいろな可能性を提供しているので、関連研究の展開はこれからの課題の一つかもしれない。

別の研究方法で議論すると、新しい結果が現れる可能性もあるが、本調査報告は、2018年12月まで中国学術情報データベースに収録されているCEFR関係の論議308本を整理し、分析を加えた。CEFRが中国でどのように受容され、どのように語られているか、言語教育を中国の文脈から、さらに世界の動向から捉えなおす基礎資料となれば幸いである。

キーワード：CEFR、研究動向、外国語教育

1. はじめに

『ヨーロッパ言語共通参照枠』（略称：CEFR）はヨーロッパの言語教育と評価の共同基礎であり、すでにこの地域の言語教育の最も影響力のある指導文書の一つとされている。CEFRが提出した言語能力等級表は多くの国と地域の言語能力等級の重要な参考根拠となっている。中国におけるCEFRの研究動向を明らかにし、CEFRに基づく外国語テスト研究と開発、コミュニケーション能力標準の完備、教材の開発・教授法の充実などを含むCEFRに基づく外国語教育研究などの課題をさらに深く議論していくために、さらに言語教育を中国の文脈から捉えなおすために考える基礎資料を提供することを目的とする。

現在中国におけるCEFR理念の受容が過去の事象の積み重ねによるものであると思われる。新たな展望や知見は研究史を踏まえた通時的な研究の視野なしに形成しえないと言っても過言ではない。先行研究による指摘は中国におけるCEFRの受容について考える際に欠かせないものである。中国におけるCEFR関係の議論が行われる一方で、その論議そのものを対象にした文献整理の研究は、管見の限り、まだ少ないように見える。データ収集の方法がほかにもいろいろあるかもしれないが、本論文は中国学術情報データベースで検索した中国語による資料（2006年－2018年）を調査し、中国におけるCEFR関係の文献を整理し、過去から現在にかけてどのような人がどのような指摘をしてきたのかを中国語によるCEFR関係の論議の歩みとして記述し、その背景とともにまとめ、考察を加える必要があると考えている。

2. 研究方法

2.1 データについて

中国におけるCEFR関係の文献として、行政府資料、関連協会のホームページ、大学や民間機関所蔵資料、雑誌、書籍、関係者の日記あるいは教材などあらゆる媒体に見られるものが該当するが、すべての文献・資料を収集し、整理することは不可能に近いことであると思われる。本論文は中国学術情報データベースに収録されている計308本の論考に絞って分析を行い、中国におけるCEFR関係の論議の変遷の一側面を浮かび上がらせることに取り組む。

中国学術情報データベース (CNKI: China National Knowledge Infrastructure) は、北京の清華大学が中心となり構築された、中国の総合的な学術情報データベースである。この大規模な国家プロジェクトの中心的な成果は、CNKI 学術文献オンラインサービスである。中国 (大陸) の学術情報を整備統合することにより、中国内外のあらゆる単位の研究機関や研究者が、学術情報の相互交換を実現することを目的に構築されている。中国 (大陸) で発行されている大部分の学術雑誌や主要な新聞、学位論文、会議論文を全文収録しており、中国を知る上で欠かすことのできないサービスであるとされている。

中国学術情報データベースに収録されている文献を研究対象とする理由は、過去から現在までの研究状況を整理し、中国における CEFR 関係の論議について、これまで何についてどのような指摘があったのかを把握するのに最適と判断したためである。

2.2 研究方法とデータの処理

調査の手法と手順は、主に以下の3つの項目にまとめられる。

(1) 現代の中国における CEFR に関わる論議の研究動向について整理するために、2006年から2018年まで中国学術情報データベースに収録されている関連の資料について、その背景とともに把握する。具体的には、論文数の経年変化を集計し、関わる事象と合わせて考察する。

(2) 中国学術情報データベースに収録されている CEFR 関係の文献は、具体的に何について執筆されたものであるかを整理するために、研究対象とされる論議の研究内容をまとめ、その特性について考察する。

(3) どのような指摘がなされてきたかを整理するために、分析対象となった308本の文献の中で、主張が明確に記述されているものを分析し、前後して複数回行われている提言から、各時期にどのような指摘がなされてきたかを考察する。

以上を通して、現代中国における CEFR 関係の議論について、過去から現在にかけてどのような人々が何についてどのような指摘をしてきたのかを整理する。

3. 調査結果と分析

この節では、まず調査結果の全体像を示す。中国学術情報データベースの整理方法では、論文はさらに学位論文、雑誌論文、会議論文に分類したが、調査結果全体像の報告では、上述の分類方法を採用して傾向を整理する。

3.1 全体像について

調査対象となった文献に関して、最初の文献は2006年刊行されたものである。2019年の文献も調査したが、年度別に論文データを整理する際に、2019年のデータは今回の経

年変化の報告に入れなかった。関連の議論は別の機会に譲る。

次は、学位論文、雑誌論文、会議論文の順に、各指摘内容と掲載年などの情報を報告する。

表1：年度別論文刊行状況の整理

刊行年	論文数	雑誌論文	会議論文	学位論文
2006	2	1	1	0
2007	1	1	0	0
2008	7	4	0	3
2009	3	2	0	1
2010	7	7	0	0
2011	14	9	0	5
2012	23	13	1	9
2013	21	12	0	9
2014	30	13	0	17
2015	48	34	2	12
2016	59	31	0	28
2017	47	28	1	18
2018	48	35	2	11
合計(本)	308	189	6	113

論文数の多い順に雑誌論文(189本)、学位論文(113本)、会議論文(6本)となっている。中国で刊行されているCEFRに関わる文献数(2006年～2018年)の推移を表1に整理する。急激な増減を繰り返してはいるものの、全体的に増加傾向にある。

論文数が最も多いのは2016年の59本であり、2015年が48本、2017年が47本、2014年が30本、2012年が23本、2013年が21本、というように、2012年から2018年までの約7年間に集中していることが明らかになった。2011年以降は計290本あり、2018年末までのCEFRに関わりのある文献数全体の94.16%を占めた。

表2：CEFRと関わりのある政策・事情のまとめ

刊行年	実施された大規模な試験、課程基準・要求、指導要領	発布機関
2007	国際漢語能力基準	国家漢語国際推広領導小組弁公室(国家漢弁)
2007	大学英语課程教学要求	中国教育部
2008	大学日語課程教学要求	中国教育部
2009	新HSK漢語水平試験	国家漢語国際推広領導小組弁公室(国家漢弁)
2010	国際交流基金JF日本語教育スタンダード	国際交流基金
2010	新しい国際日本語能力試験の実施	国際交流基金

2011	義務教育日語教学課程基準	中国教育部
2017	高等教育司2014年工作要点 大学英语教学指南 (最新版)	中国教育部

表2に示すように、CEFR関連論文とその背景とについて、中国の外国語教育の主な出来事と照らし合わせると、論文数が上位の時期に入る年は、ほぼ言語教育関係の指導要領・重要政策が策定実施されはじめた時期である。シラバス、カリキュラムへの影響を含む論考も様々に展開されていたことが窺える。

論文数の急激な増加あるいは推移は、国際中国語教育、英語教育、日本語教育関係の国家レベルの課程標準、指導要領の発布、大規模な試験の実施の新しい要求と密接な関係があると考えられる。同じ年に複数の指導要領に相当する書類が発布されたこともある。2007年国際中国語教育、大学英语教育分野の基準・課程要求の公布がその例である。

3.2 執筆者の所属機関の地域分布

CEFR関係の論考は具体的にどのような人々によって、どの段階の内容を論じているかを整理するために、地域ごとの執筆者数を明示した。また、どの地域に集中しているかを整理することために、CEFR関連論文全体の執筆者数の割合を示し、括弧内に実数を示した。

表3：論考の執筆者の所属機関と執筆者数のまとめ

	所属する行政区画	執筆者数 (人)	比率 (%)
中国国内	上海	71	17.49
	北京	59	14.53
	広東	30	7.39
	湖南	29	7.14
	遼寧	24	5.91
	浙江	18	4.43
	重慶	16	3.94
	江蘇	12	2.96
	天津	11	2.71
	ほかの省	121	29.80
	海外	15	3.69
	計	406	100.00

各論考の執筆者の大半が大学に設置された外国語学部・大学院の教師であるが、所属機関の地域分布は表3に示した通りであった。

地域としては、上海が最も多く71 (17.49%) であり、続いて北京59 (14.53%)、広東30 (7.39%)、湖南29 (7.14%)、遼寧24 (5.91%)、浙江18 (4.43%) で、全体の約6割を

占める。そのほかに、重慶16 (3.94%)、江蘇12 (2.96%)、天津11 (2.71%) と続く。地域別執筆者数の集計結果からは、古くから教育機関における言語教育を牽引してきた上海や北京、経済交流において重要な役割を果たし言語教育も盛んな広東、湖南、遼寧、浙江、江蘇、天津などの沿岸部諸都市や、中国の西部の直轄市である重慶での研究が多いことが明らかになった。

3.3 研究対象とされる段階と分野

中国学術情報データベースに収録されている文献で論じられているCEFRが具体的にどの段階のものであるかを整理するために、初等教育、中等教育、高等教育、そのほかに分け集計した。研究対象とされる段階として最も多かったのは高等教育で、続いて中等教育、初等教育となった。

表4：教育段階別の整理

段階	論文数 (本)	比率 (%)
初等教育	8	2.59
中等教育	27	8.77
高等教育	228	74.03
そのほか	45	14.61
計	308	100.00

以上の表4の整理結果は執筆者の大半は大学の言語教育に携わる教師であることから推察可能であるが、各論考の執筆者は、自身の所属する大学で行われているCEFR理論研究と教育実践を研究対象にすることが最も多く、研究対象は高等教育機関のCEFRが7割強を占めることが明らかになった。

3.4 キーワードと研究分野に関する整理

次は中国学術情報データベース付与のキーワードと論考の研究分野についての報告である。中国ではCEFRとしてどのような研究が行われてきたかを整理するために、2018年12月まで中国学術情報データベースに収録されている論考のキーワードをそれぞれ集計した。具体的には、研究対象とした308の論文を、中国学術情報データベースによって付与されている「主題」を参考に整理し、10分野にまとめている。

まずは、キーワードの量的変化の整理である。表5は各論考のキーワードの数を整理したものである。関連のキーワードが存在しない場合は「0」で示した。

表 5: キーワードの経年変化について

	06-09	10-12	13-15	16-18
学習者	4 (20%)	12 (10.62%)	14 (6.39%)	44 (11.64%)
テスト	0	16 (14.16%)	23 (10.50%)	19 (5.03%)
記述表現	0	3 (2.65%)	22 (10.05%)	25 (6.61%)
CEFR	2 (10%)	12 (10.62%)	14 (6.39%)	17 (4.5%)
英語能力	0	2 (1.77%)	6 (2.74%)	28 (7.41%)
言語能力	4 (20%)	5 (4.42%)	15 (6.85%)	17 (4.50%)
HSK	0	5 (4.42%)	6 (2.74%)	23 (6.08%)
能力尺度	2 (10%)	0	4 (1.83%)	17 (4.50%)
中国英語能力				
尺度	0	0	0	21 (5.56%)
言語能力基準	1 (5%)	5 (4.42%)	13 (5.94%)	8 (2.12%)
外国語教育	0	5 (4.42%)	9 (4.11%)	9 (2.38%)
比較研究	0	6 (5.31%)	5 (2.28%)	14 (3.70%)
言語指導	1 (5%)	9 (7.96%)	10 (4.57%)	5 (1.32%)
ヨーロッパ言語共通参照枠	1 (5%)	8 (7.08%)	16 (7.31%)	16 (4.23%)
英語教学	0	2 (1.77%)	8 (3.65%)	9 (2.38%)
大学英語指導	0	3 (2.65%)	6 (2.74%)	10 (2.65%)
大学英語	0	1 (0.88%)	7 (3.20%)	9 (2.38%)
漢語指導	1 (5%)	2 (1.77%)	8 (3.65%)	9 (2.38%)
漢語水平試験	1 (5%)	4 (3.54%)	4 (1.83%)	10 (2.65%)
EFL	1 (5%)	1 (0.88%)	1 (0.46%)	13 (3.44%)
国際漢語指導	0	2 (1.77%)	2 (0.91%)	10 (2.65%)
Can-do	0	3 (2.65%)	4 (1.85%)	7 (1.85%)
シラバス	1 (5%)	4 (3.54%)	4 (1.83%)	3 (3.44%)
実証研究	0	1 (0.88%)	8 (3.65%)	4 (1.06%)
有効性検証	0	0	1 (0.46%)	8 (2.12%)
外国語能力	0	2 (1.77%)	3 (1.37%)	6 (1.59%)
英語口語	0	1 (0.88%)	1 (0.46%)	12 (3.17%)
コミュニケーション能力	1 (5%)	3 (2.65%)	3 (1.37%)	6 (1.59%)

2006年から2009年は、当時掲載された論文数自体が少ないため、出現回数5以上のキーワードはなかった。「学習者」、「言語能力」の2項目のみは出現回数が4であった。2010年以降からキーワードの種類が増え始め、24種類に広がった。2013年から2015年は28種類とさらに広がり、数も急増した。2016年から2018年は30種類となっていて、キーワードの数もピークを迎えている。掲載されたCEFR関係の論文のキーワードは、2010年以降多様化していることが明らかとなった。

以上の調査結果から「学習者」「言語能力」「言語能力基準」「ヨーロッパ共通参照枠」「言語指導」「漢語指導」「漢語水平試験」は一貫して研究者の関心を集めていることが明らかになった。論文数の割合の変動が激しいものとして、「中国英語能力尺度」「有効性検証」が挙げられる。

表6：研究分野、キーワードと論文数との関係について

番号	研究分野	キーワード	関わっている論文の数 (本)	比率 (%)
1	学習者	学習者 英語学習者	85	14.56
2	テスト	テスト 有効性検証 HSK、新HSK 語彙表	118	15.90
3	能力記述	記述表現、Can-do	54	7.28
4	教育全般	CEFR、参照枠	69	9.30
5	言語能力、 言語能力基準	英語能力、言語能力、外国語能力 コミュニケーション能力 言語能力基準、社会言語能力	137	18.46
6	能力等級量表	等級量表 中国英語能力等級量表 言語能力量表	67	9.03
7	言語教育・ 教授法	外国語教育、言語指導英語教学 漢語指導国際漢語指導外国語教育 大学英語指導	162	21.83
8	比較研究		25	3.37
9	シラバス		12	1.62
10	そのほか		13	1.75

表6について、研究分野で最も多かったのは「言語教育・指導法21.83% (162)」、続いて「言語能力、能力標準18.46% (137)」、「テスト15.90% (118)」、「学習者14.56% (85)」、「教育全般9.30% (69)」、「能力量表9.03% (67)」、「能力記述文7.28% (54)」、「比較研究3.37% (25)」、「そのほか1.75% (13)」、「シラバス1.62% (12)」となった。

一方、CEFR関係の論考を言語別に整理すると、その結果は表7に示した通りである。

表7：言語別の論文数の整理

言語別	論文数 (本)	比率 (%)
英語教育	217	70.45
国際中国語教育	58	18.83
日本語教育	26	8.45
そのほか	7	2.27
計	308	100.00

刊行文献数の多い順に、「英語教育 217 (70.45%)」、「国際中国語教育 58 (18.83%)」(対外漢語教育)、「日本語教育 26 (8.45%)」、「そのほか 7 (2.27%)」となっている。フランス語関係 (3)、ドイツ語関係 (2)、特殊教育関係 (2) の文献を「そのほか」にカウントした。

表2に示した各言語教育に大きな影響を及ぼす指導要領・課程要求と事情のことと照らし合わせて考慮すると、国家レベルの政策支持が関連の研究を導く働きをしていると考えている。特に、英語教育の場合、『大学英语教学指南』の存在は無視できない。最新版(2017年)の刊行まで、2015年改訂版の公開も経ていた。

4. 各論考に指摘された内容から見た研究動向

4.1 CEFRの紹介と全般的な解説について

多くの研究者は言語教育の角度から CEFR に注目してきたが、その中で、中国語簡体字版の『ヨーロッパ言語共通参照枠』の翻訳者の一人である傅栄氏による論述が重要視されている。彼はヨーロッパの言語政策を紹介し、ヨーロッパの社会文化的文脈で複言語主義の意義を検討した(傅栄 2008)。傅栄(2009)は CEFR が提示する行動主義アプローチ、複言語能力や言語使用者の部分的な能力などを整理した上で、CEFR の中国での文脈化の課題を指摘している。このほか、比較教育学の角度から CEFR 解説した文献として付桂芳(2011)、張建琴(2010)などが挙げられる。鄒申・張文星・孔菊芳(2015)は中国で応用可能な分野を4つ指摘している(統一的な中国英語学習者能力尺度の制定、CEFR 理念に基づくテスト関係の研究と開発、外国語教育をめぐる検討、『国際漢語能力基準』の改訂と国際中国語教育関係の教材開発)。これらの学者は CEFR に対して詳しい紹介と比較研究を行い、より多くの言語教師が CEFR に関してもっと深く研究する可能性を提供していると思われる。蔡基剛(2012)は、現在中国語教育界が CEFR から受けている影響が限られていると指摘した。全体的に言えば、国内の学界はすでに CEFR の中国外国語教育に対する参考作用に注目し始めたが、現在は理論と政策の面でマクロ的な探索にとどまっている。

4.2 英語教育分野での指摘について

いろいろな角度からの研究が蓄積されてきたが、大きく言えば二つの方向があると考えている。一つ目は CEFR からの示唆研究及び中国の英語試験との接続に関する議論であり、二つ目は、中国英語学習者能力尺度の検討を含試験と評価関係の論述である。

一つ目の方向に関して、蒲志鴻(2008)は CEFR における「行動を指向とする」外国語教育の観念を分析し、CEFR における「行動」を教育の発展方向とする思想を中国の外国語教育に移植できると考え、行動に基づいた任務教育を提案し、実践面の問題点を予測した。傅栄(2009)は理論面から CEFR の核心理念を解説し、中国の研究者が CEFR に対す

る誤読の可能性を指摘し、例えば「部分能力」の概念を一般化してしまう。一方的に理解するなど、CEFRが中国の大学の専門外国語教育に対する参考意義を検討した。劉壯ほか(2012)は、CEFRにおけるコミュニケーション言語能力の枠組みと総合的言語素質を育成する教育理念が中国外国語教育に与える重要な意義を検討した。孫雲(2014)は中国の言語政策の研究現状を踏まえた上で、中国の言語政策発展上の問題を整理した。問題点の解決に向けて参考になりそうなヨーロッパの外国語関係の政策をまとめ、考察を加えた。

二つ目は試験と評価関係のものである。言語能力評価表の作成と中国の大規模英語テストとCEFRの接続と関係をめぐる研究に集中している。統一的な中国英語学習者言語能力表の制言語能力尺度(Language Proficiency Scales)の構築、また言語能力標準とも呼ばれ、言語使用者言語運用能力の記述である。楊惠中(2012)は英語の口語能力記述語を精密化するために大規模な実証研究を行った。楊氏は英語口語能力評価表の作成の理論、原則と方法を提供し、統一的な言語能力評価表の作成に重要な参考を提供していると考えられる。金艳、揭薇(2017)は英語口語能力評価表をさらに議論を進めた。彼らはコミュニケーション言語能力の観点で口語能力の構築に関して定義し、口語量表の枠組みを口頭コミュニケーション活動、口頭コミュニケーションストラテジーと口語テキストの特徴という3つの方面から記述し、その妥当性の検証も行った。試験と評価の分野で、ポートフォリオ関係の議論も多数存在している(洪民・詹先君・趙景梅2011、王卫军・徐建利2014、代雪2015、劉桂秋2011等)。そのほか、能力記述表現をめぐる議論も最近盛んに行われている。具体的には、記述表現全般に関する研究(何・陳2017)、学習者の角度から読解問題の使いやすさの議論(張2017)、聴解能力の記述表現をめぐる検討(張・趙2017)、義務教育段階の生徒向けの読み書き能力の記述表現の整理とその妥当性の検証(姚2018)などが挙げられる。

中国は試験の大国と思われる。アジア統一の英語言語能力レベルの尺度表を制定する構想を提出した学者も現れているが(楊惠中・桂詩春2010)。中国全国で通用できる全レベルの学習者言語能力尺度はまだ完全に開発されておらず、完成版が現れても長い時間の実践と検証が必要である。現在、中国では英語試験の種類が多く(CET-4、CET-6、TEM-4、TEM-8、PETSなど)、試験によって等級の区切りや解釈が異なり、上述した資格の社会的な認可度が混乱している。CEFRをこれらの英語試験のレベル参考枠として、相応のマッチング研究を行うことができる(閔尚超2012)。2014年11月、教育部は国家外国語能力評価表の開発プロジェクトを開始した。近年、統一言語能力評価表が発表される。実際に中国学習者の英語言語能力評価表を開発したのは楊惠中氏と方緒軍氏は、コミュニケーション言語能力理論を理論基礎とし、四技能別に記述している。しかし、中国全国で活用できる統一的な英語学習者言語能力評価尺度はまだ開発されていない状態である。統一的な言語能力評価表の制定についてホットな研究課題の一つといえる。能力尺度以外に、

最近、いろいろな角度からの研究成果も刊行されている。具体的には、翻訳能力の尺度研究 (白玲・馮莉・嚴明2018)、通訳能力の尺度 (劉建珠・穆雷・王巍巍2017) 読解能力尺度の議論 (曾用強2017)、書く能力尺度 (呉雪峰2018、鄧杰・鄧華2017等)、聴解能力尺度 (何蓮珍・陳大建2017) に関する検討などが挙げられる。

4.3 国際中国語教育分野での指摘について

国際中国語教育の目標とする学習者のグループは異なる母語背景を持っており、CEFR のような国際中国語能力の参考尺度を制定することは特に必要であるとされている。CEFR などの国際言語能力標準の研究開発方法を参考し、国家の漢弁組織の専門家は『国際中国語能力標準』(以下『標準』と略す) を研究開発し、この成果は2007年12月に公表された。2007年12月に発表された『国際中国語能力標準』は国際中国語教育の指導要領に相当する文書であり、教材開発及び中国語能力評価の参考基準を提供している。方緒軍 (2007) は現行の各種の中国語水平試験の等級区分基準に存在する不足 (例えば経験に基づく記述、主観的任意性など) を分析し、CEFR のやり方を参考にして共通の中国語能力等級表を制定することを主張し、具体案も述べている。白樂桑氏と張麗氏 (2008) はフランスの中国語教育学の中の「互換性」という新しい理念を紹介し、国際中国語教育にふさわしい標準と尺度を創立する重要性和緊迫性を指摘した。さらに、CEFR のコミュニケーション能力尺度に基づいてシリーズの国際中国語教育をどのように開発すべきかを詳しく述べている。

国際中国語教育の分野では、試験関係の議論、CEFR とのマッチングに関する研究、比較研究を行う学者が多い。具体的には、CEFR と新 HSK4 級、IGCSE 漢語水平試験との関係 (鄧巧2017)、新 HSK2 級聴解試験と TOCFL の基礎聴解試験との比較 (卓嘉駿2017)、新旧 HSK 最上級聴解試験の試験問題の比較 (徐青青2012)、ビジネス中国語口頭試験ビジネス英語口頭試験との比較 (朱2014) CEFR とヨーロッパ漢語能力基準 EBCL との比較 (宋連誼2016)、ビジネス中国語試験 BCT と CEFR との接続関係 (鹿士義2011) 新 HSK 語彙表と TOCFL 語彙表の文化的な表現の比較 (呂伯寧2016) などが挙げられる。

4.4 日本語教育分野での指摘について

林洪 (2006) はアメリカ、ヨーロッパ、中国の教育基準を比較しながら、日本語課程基準 (『全日制義務教育段階日語課程標準』(試行版)、『普通高級中学日語課程標準』(試行版)、『日語教育大綱』) をめぐる議論を行った。管見の限り、林氏のこの国際学会の会議論文が、日本語教育分野で CEFR 関係の最初の論考である。JF スタンダード以降の課程基準関係の論文として中国現行の日本語課程標準と JF スタンダードを比較した彭瑾・徐敏民 (2013) が挙げられる。

喬穎 (2011) はJFスタンダードに関して示唆を行った。喬氏はJFスタンダードの理念と内容を紹介し、中国の日本語教育に与える影響及びこの標準を教育実践に用いる方法、さらにJFスタンダードの実施から受けている日本語教育と評価システムの影響を検討した。

薄紅昕 (2017) はアメリカ、ヨーロッパの基準を参照にしながら、JFスタンダードの内容のポイントと特徴を整理し、分析を行った。日本語学習者の課題遂行能力を促進させるために、can-do教学理念に基づく評価システムの構築に関して教育的な示唆を行った。

CEFRの応用に関して、日本語専攻生向けの実践 (孫秀雲2012、李樂2013、王鈺2014等) が比較的多く見える。少数であるが、梁新娟 (2015) のような非日本語専攻生向けの実践報告も現れている。このほか、ポートフォリオを日本語教育現場に応用する試みも注目を集めた (張麗梅2015)。日本語のオノマトペ常用語彙選定とレベル分けにCEFR理念を用いて進めた研究 (曹金波2018)、ビジネス日本語の文脈でソフト日本語の言語能力尺度の作成に関する試み (孫守峰2016) も現れている。

4.5 そのほか

少数であるが、フランス語教育、特殊教育関係の議論も見受けられている。余春紅 (2016) はCEFRを参考にすると同時に、中国のフランス語学科4級試験と『フランス語学科基礎段階教学大綱』の重要な貢献を積極的に肯定した。そのうえで、中国現行のフランス語専門4級試験問題に対して分析を行い、国際通用の能力記述表現を使用して中国が自主的に開発したフランス語試験を記述した。

特殊教育の角度からの論考に関して、关文军・颜廷睿・邓猛 (2014) が挙げられる。言語テスト理論の発展は手話レベル標準の開発に指導的意義がある。彼らは言語テスト理論の発展の脈絡と全体規律を分析した上で、中国国家通用手話標準の研究開発は交際言語テストモデルを基礎とし、手話標準の研究開発の理論フレームを構築することを考慮すべきであると指摘している。手話の等級標準及び関連テストはその有効度を優先するべきであり、同時に研究開発した標準及び関連テストの手話教育の逆作用にも注意する必要がある。

5. 従来の研究で明らかになった点のまとめ

- (1) 中国におけるCEFR関係の論議は2011年から活発してきている。
- (2) 共著の場合も多いが、執筆者は上海や北京、広東、沿岸諸都市、直轄市の大学に所属する教師が半数以上を占めている
- (3) 研究対象は高等教育段階が圧倒的に多く見受けられ、全体の7割強を占めている。続いて中等教育、初等教育となった。
- (4) 研究分野、キーワードの調査から、「学習者」「言語能力」「言語能力基準」「ヨーロッパ共通参照枠」「言語指導」「漢語指導」「漢語水平試験」は一貫して研究者の関心を集めて

いることが明らかになった。論文数の割合の変動が激しいものとして、「中国英語能力尺度」「有効性検証」が挙げられる。

(5) 言語別に整理したが、刊行されている文献数の多い順に、英語教育、国際中国語教育、日本語教育、そのほかとなった。英語教育と国際中国語教育の論議が9割近くを占めた。

(6) 中国の社会文化的な環境で、言語標準、能力尺度、試験と評価に関する研究が盛んに行われてきている。特に、中国英語学習者能力尺度、ポートフォリオのような評価方法の教育現場での活用、試験と CEFR との接続や関係などへの関心が最近高まっている。

6. 従来の研究で明らかにされていなかった問題点

(1) 研究対象となる学習段階には著しい偏りが見受けられる。中学段階、小学段階、学前段階の研究が期待されている。すべてのレベルの学習者の能力尺度の構築研究を進めるための支えにもなると考えている。

(2) CEFR を中国の文脈で応用する際に、学術効果と中国大学の実情の間バランスをとりながら国家レベルの課程標準・指導要領・言語政策の制定が行われているが、CEFR が中国化していくプロセスはから受けている影響が大きい。

(3) 研究手法に関して、もっと広い範囲での質的な研究手法の活用が課題の一つであるといえよう。質的研究の方法を選択した研究は少しずつ増えていく傾向にあるが、課程標準策定に関わっている専門家へのインタビュー、特定分野の権威学者へのインタビューが比較的多く見受けられるが、現場の教師へのインタビューについて管見の限り見受けられなかった。

(4) 教員養成、教師関係の研究は3本しか見受けられなかった。CEFR をどの程度現場に応用できるのか現場の教員に頼るところが大きいと考えられるので、CEFR 関係の教師研究を進める余地がまだ十分にあると考えている。

(5) 特殊教育、他の言語教育に関する論述が十分とは言えない。CEFR はいろいろな可能性を提供しているので、関連研究の展開はこれからの課題の一つかもしれない。

7. おわりに

別の方法でデータ収集すると、違う結果が出る可能性もあるが、本論文は2018年12月まで中国学術情報データベースに収録されている中国における CEFR に関する論議 308 本を整理し、考察を加えた。課題も残されている。本調査報告では、論文を通して発信される CEFR 関係の論議を分析したが、著書の考察が及ばなかった。中国における CEFR 関係の論議は論文で展開されたもののみではないため、今後調査対象を広げていく必要がある。そして、国家レベルの政策策定・指導要領・課程標準及びその遂行の場面での教師をめぐる議論、特に CEFR が教師の教育指導と研究活動にどんな影響を与えているのか、聞

き取り調査をするのも今後の課題としたい。

主な参考文献

白乐桑・张丽

- 2008 「《欧洲语言共同参考框架》新理念对汉语教学的启示与推动——处于抉择关头的汉语教学」『世界汉语教学』(03)、58-73+3。

岑海兵・邹为诚

- 2011 「《欧洲语言共同参考框架》对我国大学英语教育的影响研究」『中国外语』(04)、31-38。

曾用强

- 2017 「中国英语能力等级量表的“阅读量表”制定原则和方法」『外语界』(05)、2-11。

冯莉・严明

- 2018 「从中国英语笔译能力等级量表研制看语言能力描述的本体论、认识论和方法论问题」『外语界』(01)、2-10。

方绪军

- 2007 「CEFR对汉语测试研发的启示」『世界汉语教学』(02)、136-143。

方绪军・杨惠中

- 2017 「语言能力等级量表的效度及效度验证」『外国语(上海外国语大学学报)』(04)、2-14。

傅荣・王克非

- 2008 「欧盟语言多元化政策及相关外语教育政策分析」『外语教学与研究』(1)、14-19

关文军・颜廷睿・邓猛

- 2014 「我国通用手语等级标准的研制:基于语言测试理论发展的思考」『中国特殊教育』(11)、34-39。

辜向东・郑宇静

- 2015 「语言测试的社会属性:《语言评测季刊》十年名家访谈录解析及启示」『中国外语』(01)、67-74。

何莲珍・陈大建

- 2017 「中国英语能力等级量表结构探微——听力描述语的横向参数框架与纵向典型特征」『外语界』(04)、12-19。

金艳・揭薇

- 2017 「中国英语能力等级量表的“口语量表”制定原则和方法」『外语界』(02)、10-19。

林洪

- 2006 「美国、欧洲、中国三个外语学习标准的初步比较 CEF・NSFLE・日语课程标准」『日语教育与日本学研究论丛(第三辑)』40。

刘壮

- 2009 「语言能力和国际第二语言教学Can do理念」『语言文字应用』(01)、115-123。

闵尚超・何莲珍・罗蓝

- 2018 「中国英语听力能力等级量表描述语效度验证——基于学生自我评价的多级计分IRT模型分析」『中国外语』(02)、72-81。

彭瑾, 徐敏民

- 2013 「“JF 日本語教育スタンダード 2010” 与我国日语教育改革——以高等教育日语课程标准的比较为切入点」『日语学习与研究』(02)、69-76。

乔颖

- 2011 「日语教育、学习、评估的参考标准《JF 日语教育 Standard 2010》与中国的日语教育」『外语教学理论与实践』(04)、72-80。

宋连谊

- 2016 「欧洲语言标准 CEFR 和欧洲汉语能力基准 EBCL」『国际汉语教学研究』(03)、60-66。

杨燕丽

- 2018 「大学法语四级考试与《欧洲语言共同参考框架》的匹配研究——以考试听力理解与阅读理解文本为例」『湖北经济学院学报 (人文社会科学版)』(08)、141-143。

余春红

- 2016 「《欧洲语言共同参考框架》中的语言能力评估体系对我国法语水平测试的借鉴意义」北京外国语大学博士论文

朱正才

- 2016 「中国英语能力等级量表效度研究框架」『中国考试』(08)、3-13。